





第10章

与論島

与論健康村

古川 誠二

(パナウル診療所・与論健康村村長)

野田 伸一

(鹿児島大学多島圏研究センター)

与論島は薩南諸島の最南端に位置する島で、人口約6千人、面積20.5km²、全島で与論町を構成し、地元では「ユンヌ」と呼んでいる。全島が隆起サンゴ礁からなる平坦な島である。上空から眺める島はエンゼルフィッシュのような形で、島の周囲にはサンゴ礁が発達しており、その美しさは「東洋の海に浮かび輝く真珠」と絶賛されている。沖縄の本土復帰までは日本最南端の島であったことから人気を集め、真っ白な砂浜とエメラルド色の海を求め、年間8万人の観光客が訪れている。パナウル王国（パナ=花、ウル=サンゴ）宣言、ギリシャのミコノス島との姉妹盟約などリゾートアイランドとしての開発が行われている。

私が最初に与論島を訪れたのは20年程前で、与論島が観光で脚光を浴びていた時期である。与論島には日本人が持つ南の島のイメージ通りの風景が広がり、視覚的にも感覚的にも南の島にいたことが体感できる場所であった。当時は、あまり観光施設がなくても、美しい海があるだけで若者が押し寄せてきた。現在でも観光は島の重要な産業となっており、観光客のニーズに合った観光の振興

が図られている。夏季集中型から通年型観光への拡大、観光の島にふさわしい景観や町並み作り、観光客の誘致につながる情報の島外への発信など様々な努力が続けられている。

昨年、与論島で開業されている古川医師とお会いする機会があった。その時に、与論島に与論健康村という民間の施設が共同して活動しているグループがあり、与論島の気候や風土を利用した健康づくりを目的としていることを聞くことができた。今回、与論健康村の活動を通じての地域おこしの詳細を古川医師に紹介していただくことにした。いろいろな地域おこしの活動があるが、その活動に医療活動が含まれ、さらに予防医学の第1次予防（人々の健康づくりや予防接種、環境衛生の改善などを通じ、疾病の予防を図ること）に配慮がなされている点は、与論健康村の活動のユニークなところである。

久しぶりに古川医師との打ち合わせのために与論島を訪れたが、その美しさに変わりはなく、着実な地域づくりと与論健康村のメンバーの活力を実感することができた。与論町振興計画の資料によると、与論町で純生産の割合が最も



空から見た与論島 ©金子喜八郎

高い業種はサービス業で、以下、建設業、農業、卸小売業、金融・保険業となっている。総人口の1/3の2千人が茶花地区に、そして東区、那間地区で中規模集落を形成し、その他の地区が小規模集落を形成して島内全域に広がっているが、近年、各集落の人口は減少傾向にあり、島全体の均衡ある発展が課題とされている。具体的方策

として、2001年度を初年度として、向こう10年間の与論町の進むべき方向、目標そして実現方法を示した第4次与論町総合振興計画がまとめられた。そのテーマは「人と自然が輝く“オンリーワンの島作り”」で、これから官民一体となって実行されることになっている。

(野田伸一)

地域おこしの活動

バブル経済の影響は、鹿児島県のはるか南の離島にも確実に影を落としていた。その名残を、商店街のシャッターの下ろされた店や、島のあちこちに点在する閉じられた民宿、果ては使い道のよくわからない百合が浜のモダンな建築物に見ることができる。まさにつわものどもが夢の後という感である。離島にして、茶花銀座通りと呼ばれる商店街の地価が坪70万円ほどだと聞いた時には、もう開いた口がふさがらなかった。バブル崩壊後、日本経済のゆがんだ部分を抱えたまま島の行政もごたぶんにもれず赤字の地方財政に転落していった。さばききれないほどの多くの観光客から得た収入はどこに消えてしまったのだろうと誰もが言う。少子高齢化社会の到来で、島の人口は徐々に減り、将来に誰もが不安を感じる時代が到来したのである。

そのような時代の変化の中から今までにない動きが少しずつ出てきた。それはややもすれば公共事業中心のお上に頼った地域活性

化を図る構図になりがちなこれまでのものとは違い、民間が自分たちでできることから手作りの地域作りをはじめようという動きが出てきたことである。人間の生き方を方向転換するという意味では、むしろ時代のもたらした恩恵ともいえるかも知れない。その代表は、私達の考えた与論のアイランドとしての特徴を生かした健康づくりの島を目指す与論健康村と、与論の伝統的な産物や歴史、言葉などを生かした地域作りを目指す与論民俗村、ならびに姉妹提携を結んだギリシャのミコノスとの関係をもっと実質的な文化、物産、人的交流を深めてギリシャのイメージを持ったまちづくりを目指すヨロン島ギリシャ村の設立などである。また地域婦人部や、4Hクラブ、異業種間交流クラブなどの動きもここに来て活発になっている。それぞれの個別の動きをまとめようと地域振興10か年計画では、第一線に立つメンバーが集ってまちづくり検討会として協議を重ねた。通常の町当局から依頼をうけた4回の会議以外に、番外編としてほぼ毎週午後8時から夜中まで徹底して討論を行った。この結果については、与論町議会の承認を得て正式な計

画書となっているので概略を最後に紹介したい。

検討会を進めていくうちに改めて確信したことは、言い尽くされた言葉ではあるが、地域興しはやはり人材である。責任者を仰せつかったこの時期、与論にいつの間

にかこれだけの人材が集っていたということに、私は驚きとともに大変恵まれた状況であることにつづく感謝した次第である。地域おこしは、東京からでも地方からでもない、その地域に住む人からである。

与論健康村構想

私は、1988年に縁あって与論町立診療所に赴任した。地域を考えた全人的医療を実践するプライマリ・ケア医を自称する私にとって、医療圏の明確な離島は最適地であった。与論島は鹿児島県とは言え、県庁所在地から500kmも離れ、また琉球王朝の長年の影響を受けた特殊な地理的位置にあり、独特の文化や風習を持っている。また、その美しい風景は自然破壊が進んだとは言え、今でも多くの旅人を魅了してやまない。そんな与論での医療の中で、病気の本質は、その生活や、地域の持つ風土の中にあり、その独特の地域が、またある人にとっては癒しの空間となることを確信した。何せ人口

6,000人あまりの島で、90歳以上の高齢者が120人もいる。それもばりばりの現役の人が多し。島の持つ特性を生かした健康作りを、国土庁の地方振興局離島振興課はアイランドセラピーと称し、その特性を、

- 1) 非日常的な環境：海によって隔てられている島は、その孤立性、狭小性によって都会人の生活環境と異なる環境などを提供し、転地療養や健康保養に適している。
- 2) 島には美しい自然が多く残され、景観的にも優れた場所が多く、散歩やハイキング、サイクリング、海水浴をはじめとしたマリンスポーツ、レクリエーションの展開が期待できる。
- 3) 島には古くからの固有の文化が蓄積されており、都会人が忘れ

かけている人々の結びつきや交流が盛んに行われている。島での滞在は、健やかな心を養い、疲れた心を癒す。

- 4) 島で取れる海産物や農産物はヘルシーな食材である。
- 5) 美しい海に囲まれている島では、どこでもタラソセラピーの効果が得られる。

としている。まさに、与論島は島の大きさや形、気候、文化からしてこのアイランドセラピーに最適の島である。

与論健康村の構想は、私が与論町国保直営診療所に赴任した当初から頭に描いていたものであった。そして当時、与論プリシアリゾートからも健康保養地としての構想があり医療面での協力を要請されて相談に乗ったことがある。与論町でもそれに取り組むような

動きが一時あったが、なぜかいつのまにか中断してしまった。そのころの思いをずっと抱いていた私の与論健康村の活動は、アイランドセラピーの構想が発表される前から開始されたが、さらにこの構想にわが意を得て、既存の施設を活かし、医療観光という観点からより幅広く取り組むことにした。

WHOによると、健康とは肉体的、精神的、社会的に well being な状態であるとされているが、私はこれに先に提案のあった spiritual well being な状態であるということ を定義に追加したい。スピリチュアルによい状態とは、私は自分の与えられた人生の目的に向けて一生懸命に生きていく状態であると考えている。与論健康村では、そのような健康びとを目指した活動を進めて行きたい。

与論健康村の活動

与論健康村は、1995年にその名を正式に旗揚げした。先に述べたように計画は10年来温めていたものであるが、私のパナウル診療所を那間という自然に包まれた新天地に移してから実質的な活動が始まった。土地を貸してくだ

さった方とはそれ以前から有機農法で健康な食材や熱帯果樹の生産をはかるという構想を練っていたが、ちょうどその頃から熱帯果樹の収穫も始まり、シャロン農園として仲間に加わって頂き、園芸療法も兼ねて食と健康の部門の中核となった。新築移転したパナウル診療所は、大断面修正材を利用した全木造建築とし、健康増進のための空間を施設の半分をとった独自の構造とした。

1次予防医学を柱にしたいと考えていた私は、高齢者のデイサービスとしてのふれあいデーの開設、そしてウォーキングをはじめストレッチ体操、リズム体操などの健康スポーツ教室を定期的に開催することにした。また、環境が健康に及ぼす影響の重大さを鑑み、年2回環境と健康をテーマにフォーラムを開催。環境にやさしいといわれているケナフの栽培などにも取り組んだ。

ちょうどこのころ、与論に赴任したときから特産品作りの相談を受けていた方が、もずくそばの開発に成功し健康食品として売り出した。以前からの課題だった塩作りにも取り組み、自然塩じねんの名で、伝統的なきび酢は黄金酢の名

で、ともに健康村の一端を担うようになった。また、島外からの長期療養者の受け入れのための宿泊施設として、すぐそばの与論島ビレッジ、民宿楽園荘、与論プリシアリゾートに協力してもらうこととした。ほかに陶芸教室として、与論焼き窯元、ゆんぬあーどうる焼き、手芸教室にギャラリー海、気軽に集まれる場所として、居酒屋ひょうきんなどが仲間となってくださった。総合的な健康づくりを目指す健康村の運営は、独立した企業の共同事業の形にし、年会費5,000円として運営の規約にあたる簡単な定款を作った。一般会員は年会費1,000円とした。(詳細は与論健康村ホームページを参照。<http://village.in-foweb.ne.jp/fwbc7262/>)

このような形態の組織はもちろん与論では初めてで、与論健康村として観光協会に入会したときは、何をする組織ですかとなかなか理解してもらえなかった。最近では、療養のための長期滞在者が冬場に増えて観光に役立つことがやっと理解されつつあるようである。

与論健康村がはじめた月1回の定例ウォーキングは、いまや与論町観光協会に事務局を置くヨロンウォーキング愛協会にまで発展し

た。与論島の1周ウォーキングコースを大きく5つのセクションに分けてそれぞれに名称をつけて年間を通して誰でもが歩けるようにパンフレットを作った。年1回11月に開催しているヨロンパナウルウォークは、毎年全国からの参加者が約200名あり、今回は10回目の大会となる。

伝統的な唄三味線は与論の人々の生活にとっては切り離せないものである。最近まで島の男女はこの三味線の交流を通して結ばれていた。月夜の晩に男は好きな女の家を三味線を弾きながら訪ねていく。女も好きな男の三味線の音を待ち焦がれて一緒に出て行く、いわゆる浜遊びの習慣である。与論の伝統的な三味線を癒しの道具として取り入れ三味線教室を開催している。1か月滞在の間に大概1、2曲は引けるようになる。また、地域の子供達にも参加してもらって伝統の継承という意味でも役立っている。

さらに、定住者のための与論健康村住宅を建て、モデルとして紹介している。定住者が、新しい地域興しの風を吹かせることも期待できるし、交流が広がる。もちろん人口の増加はそのまま地域活性

化につながる。特異な事例だと思うが仏教の普及していない島に、布教させたいと願っていた日蓮宗の上人と縁あって出会い、与論島に在住して下さることになった。現在心のケアの部門で時々法話を聞かせていただいている。

地域交流のために北海道の新冠と小学生の交換留学をはじめた。まず手始めに、2000年の1月2日から7日まで、与論の子供達に冬の北海道を体験してもらおうと4名を引率していった。子供達は、太陽小学校の子供達の家ホームステイをして、酪農農家の様子を見たり、スキーをしたり貴重な体験をすることができた。また、7月の末からは新冠の子供達が8名与論の夏を体験するためにやってきた。来島時、あいにくの台風にあってしまったが、それでも合間を縫って海で元気に泳ぐことができた。そしてまた今年2001年1月に与論の子供達3名が北海道にいった。資金は、本人負担を少しとして、大方をバザーや寄付でまかなった。

与論健康村ホームページは数年前からオープンしていたが、最近与論を愛する島内外の人に参加してもらおうと与論健康村メーリングリストなるものを作った。現在約100

名ほどのメンバーが加入しているが、色々な情報交換が活発にできて新しい形のネットワークが進んでいる。おまけにインターネットは時間と距離の壁を完璧に取り去ったので、国内はもちろん、アメリカ、香港、インドなどと常に交流ができるようになった。島を訪れるメンバーとは、時々オフ会をして直接顔をあわせての交流も行っている。

さらに新しい事業として、キビ刈り援農隊を募集し、農家と都会の青年との交流もはじめた。今年度は、15名ほどの応募の中から選抜された5名の若者が参加した。なかなか積極的に仕事に取り組み上々の評判のようである。

最近の試みとして、自然エネルギーの利用のために、プリシアリゾートの敷地内に、風力発電と太陽光発電を併用した、いわゆるハイブリッドタイプの発電装置を設置中である。今後とも、環境にやさしいクリーンエネルギーの島、健康な食材の提供できる島、環境と健康を考える島として、総合的な健康作りの場としての与論島のイメージを作り上げていくことを与論健康村としては目指したい。



ヨロンバナウルウォーク ©古川誠二



与論健康村の事務局があるバナウル診療所
©野田伸一



バナウル診療所内での健康スポーツ教室
©古川誠二

今後の展望

与論の将来の計画としての一つとして、与論町振興 10 年計画をまとめたのでこれをもとに今後の展望について紹介したい。与論健康村の目指す方向はこの中にもこまれている。

大きなテーマは、オンリーワンの島作りである。

オンリーワンの島作りとは、与論にだけしかない、与論でしかできない、他の地域に負けない、自慢できるなどの特徴のあるものを作り上げる島作りのことである。与論島独自のカラーを出すためには、地域の資源、文化をよく理解し伝統の上にならなくて、さらに新しいものを加えていくという作業をしなければならない。そこで、基本構想として

- 1) オンリーワンの人づくり
- 2) オンリーワンの産業作り
- 3) オンリーワンのまちづくり

を掲げた。地域を興すにはまず人がいる。これからそのような地域を担う人材を養成しなければならない。よく言われるよそ者、若者、ば

か者はもちろんのこと、総合的に発展していくためのバランスの良い人材が必要である。

また、具体的なプロジェクトとして次のようなテーマを取り上げた。

- 1) 島を支える頭脳集団づくりとして、ゆんぬまちづくり大学の設置、まちづくり委員会の結成。まちづくり大学では、1 年間の準備期間を置いて正式な事務局とカリキュラムを作成し、1 年単位で卒業とする。その卒業生を今後は実践の場での指導者として活動させる。まちづくり委員会は、まちづくり検討会のメンバーを基本として新たに適任者に加え、10 年計画の推進や監視にあたる。
- 2) 生きた博物館構築プランとして、ユンヌエコミュージアム構想の推進、与論・ギリシャ交流のまちづくり推進、与論ブランド創造プラン、与論特産品開発支援センターの設立、絹芭蕉布の特産化事業の推進をする。現在あるようなテーマパークや保存する施設を作るのではなく、実際に活動していて、体験できるような形で与論の文化や伝統を紹介する。ギリシャとの交流もさらに人的にも

物質的にも内容を深めて行く。与論島独自の物産がまだまだ少なく、与論の有志が一丸となって特産品開発に取り組む。またそのために24時間オープンセンターも設置する。歴史的な織物の芭蕉布を絹との組み合わせでさらに新しい織物として開発していく。そのことにより伝統的な大島つむぎや、芭蕉布の技術を残すことができる。

- 3) 情報の島づくりプランとして、情報基盤の整備促進、情報教育の推進、ソフト産業の誘致促進をする。すでにこの事業は郵政省の補助も決定しており現在の所、与論中学を中心にインターネットを駆使した情報教育、光ファイバーとASDLを結んだブロードウェイ構想がスタートしている。
- 4) ゆんぬふれあい交流プランとして、ゆんぬ文化交流事業の展開、健康作り交流事業の展開、ギリシャ経済交流事業の展開をする。経済交流にはすでに日本貿易振興協会（ジェトロ）の多大なる支援を頂いている。
- 5) 環境の島作りとして、環境基本計画の策定、新エネルギーの導入、活用、与論の海再生プロ

ジェクト、環境学習の推進を行う。環境破壊問題は地球規模の問題でもありまた、与論の自然をいかに保護するかというローカルな問題でもある。与論の美しい海をいつまでも残してほしいという願いは町民のみならず、与論島を愛する全国のファンの願いでもある。与論の海の状態を調べるためにリーフチェックをはじめた。向こう10年間調査データを集める予定である。また、自然エネルギー利用で、風力発電装置の設置計画が進んでいる。

これらのプロジェクトをこれから官民一体となって実行する予定である。誰もが住んで見たい島、住民達が誇れる島、そんな島になって初めて東洋の真珠与論島が輝ける日が来るであろう。与論健康村としてはさらに、自給自足の島を目指し、那間地区を農業とITの地域（仮称ナマバレ）としたいと考えている。

定住者の促進を図るとともに、これからさらに与論島内外を問わず人材を養成し集めていく予定である。

（古川誠二）